

6月例会報告

【日時・会場】2001年6月19日(火)19:15～21:30 筑波大学附属高校会議室～2:00 カリンカ

【参加者(会員)】荒井義行(毎日新聞運動部) 井上俊也(NTT 東日本) 宇都宮徹彦(写真家) 笹原勉(日揮) 鈴木崇正(NEC メディアプロダクツ) 竹原典子(保健婦/浦和サポーター、スチュワード) 長岡茂(JAWOC 茨城支部) 中塚義実(筑波大学附属高校) 福田晃広((株)スポーツナビゲーション) 堀美和子 宮崎雄司((有)オフィス・アステカ代表/サッカーマニア編集長) 村林裕(FC 東京)

【参加者(未会員)】麻生征宏(筑波大学大学院) 片岡麻衣子(中央大学法学部政治学科) 竹沢徳剛(中央大学法学部政治学科) 吉田誠一(日本経済新聞社)

注) 参加者は、所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

本報告は、月例会での発表とディスカッションの内容を中塚義実がまとめ、参加者の確認を経て公開するものである。今回の発表は、7月22日に予定されている「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」の内容でもあり、詳細については、後日まとめられる報告書を参照していただきたい。

コンフェデレーションズカップを振り返ってー運営の立場から
長岡茂(JAWOC 茨城支部)

<目次>

- ・コンフェデレーションズカップの準備
- ・大会組織
- ・ジェネラル・コーディネーターとは
- ・FIFA のカウントダウン・スケジュールについて
- ・コンフェデレーションズカップを通して見えてきたこと
- ・解決すべきこと
- ・人的資源の確保とは?
- ・人的資源の現状について
- ・2002年に向けて
- ・サロン2002として
- ・ディスカッション
- ・感想・意見(中塚義実)

●コンフェデレーションズカップの準備

2月上旬に FIFA から最終オファーがあり、3月に開催が正式に決まったので、実質的には4ヶ月もない

状態で準備に取りかかった。2002年へ向けての準備期間が6年間ほどあったことを考えると、非常に短期間でいろんなことをやった。そして、FIFAが行う大会のスタンダードを知ることができた。

●大会組織

各会場にはFIFAから4名来ている。トップに立つのがジェネラル・コーディネーターで、すべての最終的な権限を持つ。この他にメディア・オフィサー、テクニカルスタディ・グループ、ドーピング・コーディネーターがFIFAからの派遣である。

ジェネラル・コーディネーターの下にベニュー・コーディネーターがいる。これは日本側の組織であり、会場の総括である。今回はJAWOC、県サッカー協会、自治体が共同でLOCを組織した。ベニュー・コーディネーターの下には、競技運営、セキュリティ、ボランティア、マーケティング、AD(身分証明)、プロトコル(VIP対応)、アコモデーション(宿泊)、ITの各部署が位置づけられ、活動した。

長岡氏の担当した競技運営部門は、試合の時の競技進行、公式練習会場、及びユースプログラムの3つが主な業務。ユースプログラムとは、試合前の国旗やフェアプレー旗を持つ子どもたち、ボールキッズ等が担当となる。例えば国旗についてのリクエストは、日本人が思う以上にFIFAからの要求は高い。国旗をピンと張って入場することなど、子どもたちがぼてぼてになるぐらいまでリハーサルしないとうまくできない。

●ジェネラル・コーディネーターとは

ジェネラル・コーディネーターは、選手・審判の入場の際には先頭に立ってエスコートしている。但し、あくまでも裏方なので、ピッチに立つなどはもってのほか。今回は、新潟での日本対カメルーン戦の際、新人のジェネラル・コーディネーターがピッチ内に立っており、運営の人間として冷や汗ものであった。

ジェネラル・コーディネーターは、FIFAから指名を受けた人間になる。茨城会場ではイタリア人で、イベント会社の仕事をしている人であった。日本人はいない。AFC全体でも、フランス大会時のピーター・ベラパン以外にはいないと思う。現在行われているワールドユースは、若手のジェネラル・コーディネーターの育成の場でもあり、若い人間が送り込まれている。そこで評価され、できなければFIFAがどんどん外していく。

「ジェネラルコーディネーターの言葉は、ゼンルフィネンの言った言葉と同じ」。それぐらい大きな権限を持つ。

●FIFA のカウントダウン・スケジュールについて

FIFA の大会では入場からキックオフまでのカウントダウン・スケジュールが決まっており、すべて 9 分間である。

- ・選手がロッカールームから出て通路に集合…9 分前
- ・子どもたちが国旗を持って入場…8 分前
- ・フェアプレー旗及びチーム・レフェリーが入場…7 分前
- ・両国国歌…6 分前～3 分前
- ・握手・集合写真・ペナント交換
- ・キックオフ J リーグでは国歌がないこともあって、アントラーズでは 5 分前に通路に集合している。

国歌は、コンフェデ杯では生演奏にせず、FIFA で CD を用意した。両方で最大 3 分間。1 分 30 秒でうまく切っている。

●コンフェデレーションズカップを通して見えてきたこと

1) コンフェデはコンフェデ

ほぼ滞りなく行われたが、W 杯を甘く見てはならない。コンフェデ杯はチームのモチベーションが異なるし、メディアもお客さんも日本人ばかりだった。

2) メディアの知識・認識

地元メディアの国際経験の欠如。ここぞとばかり取材申請し、チームが泊まっているホテルに押しかけようとする。メディアも舞い上がっていた。世界大会のしきたりに合わせて取材してほしかった。また、フーリガンのことばかり書かれて困る。怖いのはフーリガンだけではない。イスラエルがヨーロッパの 2 位になって、AFC 3 位がアラブの国だったらどうするのか。そういうことの方が怖い。また、中国やイランが本大会に出場した場合、チームが負けてもサポーターがそのまま居座るかもしれない。不法滞在はシドニー五輪の時にも問題になった。

3) スタンドアートの違い

ものごとの考え方、進め方が違う。日本ではものごとをきちんと決めて、一度決めると変えられない。向こうの人は、基本を決めて、あとはより良い方法があれば柔軟に変えていく。鹿嶋会場では、部屋回りを第 2 戦からすべて変えさせられた。それは第 1 戦における人の流れを見て、ジェネラル・コーディネーターが判断したもので、こういうことは日本ではできないだろう。

FIFA から来る人はバイリンガルどころかマルチリンガル。これも新鮮だった。

4) チーム間の差

お国柄の違いは特に練習会場と試合後の更衣室に顕著に表れる。

練習会場では、ブラジルは、選手が来る 2 時間前に用具係が来て仕事をしている。靴当番、ユニフォーム当番、リフレッシュ当番と 3 人いる。ブラジルの選手はほとんど手ぶらでやって来て、用具係が準備した用具をつけ、練習後はシャワーを浴びてきちんとした身なりで帰っていく。一方カメルーンは、練習着のままサンダル履きでやって来て、更衣室も使わない。練習もわあわあ言いながらやって、着換えしないで帰っていく。カナダは、オジェックの指導もあるのか、整然としており、練習後もテーピングのゴミは自分のかばんに入れて持って帰る。日本は行儀がいい。

試合後の更衣室。カメルーンは、負けたこともあるが「嵐の過ぎ去った後」のようで、後片付けが大変だった。ブラジルは用具係が後片付ける。スタッフとも仲良しになった。カナダは終わったあとの更衣室も非常にきれい。日本もきれい。

来年鹿嶋に 6 チームやってくるが、練習会場と更衣室に注目したい。

5) FIFA の大会でしか経験できないことを経験できた

6) 全体的に及第点はもらえた

特に準決勝のゲーム、どしゃ降りの雨にもかかわらずピッチコンディションが素晴らしいのには、FIFA も驚いた様子。横浜のピッチを管理している人に感謝状が贈られたという話も聞いている。あれだけ雨が降っても日本でできるということがアピールできた。

●解決すべきこと

1) 人的資源の確保

これが大問題。茨城においては、必要としている人数に対して 50%いくかいかないかという段階。

2) 言葉の問題

リボンで色分けして、何語が話せるかを明らかにする工夫などが必要。スタジアムの外でも必要

3) ベニューへ足を運んだ人に(チケットのない人に)

試合後の混乱をどう回避するか。駅近くの公園でのクロードサーキットなどを、鹿島市を含めて検討している。放映権問題がクリアーすれば、そこでどんちゃん騒ぎをして夜を明かしてもらうことも一つの考え。

4) 輸送・宿泊問題

大きな問題。今回はバスで 1 時間以上待った人もいる。しかし、道路状況は来年に向けて準備をしているので一変する。橋も渡るし、スタジアム周りの道路も、水戸側に抜けられるようになる。

それ以上に問題なのが、コンフェデでは日本人が来ているのでスタート地点がわかるが、W杯ではスタート地点がどこになるか全く読めないことである。今回ブラジルは名古屋から入ってきた。来場者がどこを起点にするかによって、どのような交通手段を用意するかが変わってくるので読みにくい。

5) 不安感の一掃とリスク回避の方法論

フリーガン問題ばかり書かれると、地元住民が不安になる。できる限りリスクを負わないように、セキュリティを含めて明示すること。それによって地元の人たちの協力も得られる。

●人的資源の確保とは？

1) 仕事日は試合日だけではない！

試合日以外の人材が重要。練習会場、ユースプログラム、競技進行などにおいても、試合のない日に次の試合の準備をしなければならない。しかし現在の JAWOC の募集の仕方では、試合日だけと捉えられてしまう。試合日の方が華やかだが、試合日以外の必要性を認識してもらわなければならない。

2) 勤務時間も早朝から深夜まで

新潟での日本対カメルーン戦当日、日本代表は朝 7 時半から練習をはじめた。競技運営担当はそういうリクエストにも応えなくてはならない。

3) 現在の募集は"試合日"が中心

4) たとえ1日のみ、1時間でもありがたい

5) パズルのような組み合わせ作業

いろんな勤務条件の人材を組み合わせることで人的資源を確保することが必要ではないか。8時間ずっと働ける人はいない。だから募集も伸びない。1時間でもいいから協力してくださいといえ、もっと掘り起こすことができるはず。

6) 特技をいかに活かせるか(双方に)

鹿島のボランティアの平均年齢は 40 歳ぐらい。階級の往復はしんどい。そういう仕事は大学生など動ける人がいいのではないか。

●人的資源の現状について

1) かなり厳しい現状である

2) 順調に集まっているところでも、見通しが明るいわけでは決していない

新潟では、コンフェデに向けて募集したけど、研修会をするごとにボランティアが減っていった。

3) 国家的イベントに対する国家レベルでのサポート

大学で授業の単位としてボランティア活動を認めてもらえないか。シドニー五輪のとき、メルボルン大学の学生は、ボランティア活動によって単位が認められていた。このようなサポートが必要。「学校休ん

で来い」とは言えない。

4) 募集条件の見直し

試合日以外にもあなたの力が必要ですよということをもっと訴える。試合のチケットを持っている人は試合日には手伝えない。試合日以外の募集をもっとすべき。8時間を募集の単位としているから無理がある。

5) 本当に締切日が必要なのか

6月末が締切りとなっているが、なぜ締切りが必要なかわからない。1年先のことはわからないという人もいる。15日締切りが30日になったがどうなのか。間際になって抜ける人もいるだろう。間際になっても受け入れるべきではないか。

6) 参加する人も、本当の"ボランティア"に対する意識をもってもらいたい

ユニフォームがあろうがなかろうが、奉仕していただくのが本来ではないか。1時間しか働かない人にはユニフォームは支給できない。感謝状程度だろう。それでも大会に参加し、盛り上げる。そういう意識で参加してもらいたいのだが。ボランティアに対する意識が、欧米人と違う。

●2002年に向けて

1) 開幕まで1年を切った

2) 時間はあっという間に経過してしまう

FIFA から来るリクエストはもっと膨大で範囲が広い。準備期間としての1年間は充分なのか。

3) 大会に参加することは、思っているよりも簡単

自然体でボランティアに参加してもらいたい。

4) 参加する限りは、与えられることよりも、自分から積極的に何かを得ようとする姿勢を

運営側としては、自分たちの仕事のオペレーションで精一杯。ボランティアが「皆で集合写真を撮りたいんです」と思えばその人たちで動いてほしい。ボランティアの皆さんの積極性を期待している。

5) 日本の歴史上はじめて以来の外国人が日本に上陸する

オリンピックは一都市のみ。それが10都市にやってくる。その時、日本人としてどう振る舞うか。

6) 70年万博以来の国民全てにインパクトを与えるイベントに!

子供時代に大きなインパクトがあった。「月の石」「新幹線」「大阪」…大きなインパクトを持つイベントにできたらなあ。

●サロン 2002 として

- 1) 行動に移すことがポリシーではないか？
 - 2) 参加の仕方は各自の自由である
 - 3) 今からでも遅くはない
 - 4) ただ、ちゅうちょしている余裕はない
 - 5) 各自の活動が W 杯以降の日本スポーツ界にとってプラスになることを願う
 - 6) 2002 年 7 月 1 日からは新しい姿のサッカー界にならなければいけない
- 皆さんの叡知を振り絞って何かができればと思う。

<ディスカッション>

●スポンサーとボランティア

・フランス大会も長野オリンピックも、スポンサー企業がボランティアを出し、研修も自前で行っていたが、今回はそうはなっていないのか。フランス大会では「マンパワー・フランス」がスポンサーになっており、ボランティアはマンパワーと契約していたので有給だった。また「長野オリンピックのボランティアもしたいのでスポンサー企業に入りました」という人もいた。スポンサー企業の中で社内選考がある。企業がボランティア募集の窓口になっていた。

・日韓共催の影響か、または 2002 年からスポンサーのパッケージが変わったので、人を派遣するということが契約内容から外れてしまったのかもしれない

・地域の人たちだけでボランティアを募集しているような状況。それだけで人を集めようとするのは、確かに「いい根性している」。

・今までは特定の企業や学校を中心にボランティアを募集していたが、今回は完全に公募というのが特徴的 ・ 今後は、県サッカー協会からボランティアを掘り起こすことなどを考えている。

●ボランティアの業務内容とモチベーション

・清水スポーツとボランティアは、異なるエリアを担当する。横浜でも鹿島でも、スタンド内は清水スポーツ、外はボランティア。ここで、同じ仕事をしているのにお金をもらっている人とももらっていない人が出てくることになる。このあたりをきちんとしないとボランティアのモチベーションが低下する。

・ボランティアに対して横柄な態度を取る運営側の人がいるのではないか。そのことがボランティアのモチベーションを下げている。

・ボランティア事務局にボランティアのことがわかっている人がいるかどうか、ボランティアのリーダーを誰にするか、リーダー同士の連携をどうとるかなどが重要。仕事するのはいいけど、誰に頼まれるかでモチベーションが変わってくるのも事実。

・スポンサーからのボランティアなら会社の属性がそのまま反映される。大会が終わってなくなる組織と大会後も続く組織の違いはある。

●ボランティアの募集について

・JAWOC ボランティア募集要項を読んでも、横柄な印象を受ける。締切りを作っている場合ではない。・言葉ができなくても、練習会場では「ピッチ上にきちんとラインを引ける人」がほしい。

・長野オリンピックの日本人ボランティアに一番欠けていたスキルは大型免許。幸い鹿嶋は住友金属の関係ででかいものを運ぶ人間がいる。その中には、波崎の方で合宿バスの運転をしている人も大勢いるので大丈夫だろう。

・JAWOC では有給は無理。しかし、有給でない人が事故を起こしたらどうなるのか。そこで、どこかの会社に委託してやってもらうことも考えている。特に運転手は 24 時間態勢になるので、ボランティアでは無理。

●イベントを取り巻く権利ビジネスの影響

・会場をとりまく町そのものがイベント空間であるような、そんな祭りを期待したい。会場外でいかに楽しむか。しかし、横浜では何もやっていなかった。

・鹿嶋では周辺で県の物産展をやっていた。しかしこういうのをやる際に、ライセンスホルダーとしての FIFA マーケティング(ISL から譲り受けた)との関係が微妙。鹿島スタジアムでは、フェンス内が JAWOC の管理エリアで、隣の体育館がメディアセンターになるのでそこも管理エリア。その周辺で、スポンサーと競合する自動販売機があれば、スポンサーから「撤去して下さい」といわれる可能性がある。しかし本来ここは自治体の管理エリアなので、FIFA マーケティングと自治体の話し合いになる。今回アントラーズの練習場の看板類は全部マスキングした。ゲームの前座で行われた少年サッカーも、アディダスしかだめ。シューズも他社のものは黄色いガムテープでマスキング。そのぐらいうるさい。ピッチ上には他社のボトルは置けない。

・スタッフのドリンクペットボトルも同様。控室でもカバーを取りはずす。厳密にいうとキャップにマークが入っているので、キャップも塗りつぶした。

・オリンピックでは五輪マークが入ったものしか置けない。中身は異なっている。

・ライセンスホルダーの権利がかなり保護されている。ユースプログラムの中で言うと、今回、ナショナルフラッグビューアラー(国旗持ち)とボールキッズに関してはコカコーラが権利を持っていたので、コカコーラが募集した。ボールキッズは第1戦は大阪府岸和田から、第2戦は千葉の佐原、第3戦は滋賀から来た。試合当日にやってくる、毎回異なるボールキッズにボールボーイのいろは(「広告を飛び越えるな」など)を教える。しかもJリーグでは16人配置しているのにFIFAでは12人しか使えない。FIFAがボールボーイは12人だといえれば12人。コカコーラは人選だけやるが、旗を持つ位置まで決められてくる。そんな中で実際にやっていく。彼らの権利は絶対なので、その中でしかできない。

・例えば、サッカークリックからJAWOCのホームページにリンクを貼らせてくれとのお願いに対して、当初広報部はOKを出したが、事業部と相談した結果、認められないとの回答が来た。オフィシャルスポンサーが東芝なので、NECがやっているものはだめだという理由。JAWOCはインターネットの「リンク」の文化を理解していないし、JAWOCのHPがどのように開かれるべきなのかという広報活動について判断を停止している。このようなことは他にもあるのだろう。FIFAの権限が非常に強大なのはわかるが、JAWOCの「こういうワールドカップにしたい」という積極的な意思が感じられず残念。

<感想・意見(中塚義実)>

選手入場からキックオフまでが、綿密なカウントダウンスケジュールに従って9分間で行われている(FIFA主催の場合)こと、選手や審判団を先導する「ジェネラル・コーディネーター」が、大きな権限をもつ運営責任者であること、ワールドユース大会は「ジェネラル・コーディネーター」を育てる場でもあるということ…新鮮な話でいっぱいだった。そして、長岡さんの周辺には、運営側からみた「もう一つのワールドカップ」があると感じた。

1998年フランス大会予選終了後、サポーターの手記を集めて『もう一つのワールドカップ』という本が出版された(サロンのメンバーも何人かこれに関わった)。「ドーハの悲劇」で語られる94年大会予選でもサポーターの物語はあったし、「日本サッカー狂会」のサポート物語はJリーグよりもはるか昔からあった。しかし、ワールドカップそのものが国民全体に認知されていなかったこともあり、それらの物語は一部の間の小さなお話でしかなかった。98年大会予選時に、サポーターが「もう一つのワールドカップ」の主演に踊り出たのは、語れる場としてインターネットが普及していたこととともに、サッカーの構成員としてサポーターが認知されるようになったことが背景にあるのだろう。

開催国として迎える2002年大会では、もっともっといろんな人の、いろんな物語が語られ、伝えられるべきである。世界最大の祭典の中身はサッカーの"競技"だけではない。今度のシンポジウムでは、運営側の長岡さん、ボランティア側の竹原さん、そして新潟で市民活動をされている小島さんが、それぞれの物語をどう語ってくれるのか、非常に楽しみである。会場にいる人からも、多くの物語を引き出したい。そして、サッカーファンだけでなく、より多くの人に「もう一つのワールドカップ」の主人公になってもら

えればと思う。

公認キャンプ候補地としてルーマニアを逆指名して活動していた飛騨古川町が、ついにルーマニアサッカー協会からの内定を取り付けた。すばらしい物語である。あとは、ルーマニアが予選を突破して出場してくれるのを待つばかり。飛騨の小さな町の物語と、ワールドカップ予選を戦う選手・ルーマニア国民の物語が重なり合ったときに、この関係は **2002** 年以降も続いていく強いものとなるのだろう。今後とも注目していきたいし、そのようないろんな物語をもっともっと取り上げていきたい。 **2002** 年は「もう一つのワールドカップ」のオンパレードにしたいですね。